

四月八日、もしくは月遅れの五月八日は、お釈迦さまの誕生を祝う日『花まつり』です。また、『降誕会』や『灌仏会』とも呼びます。お寺では「花御堂」を設け、右手で天を指さし、左手で大地を指さしたお釈迦さまの誕生仏を祀ります。

また、白い象に見立てた引き車の上に「花御堂」を乗せ、町を練り歩くお寺もあります。

お釈迦さまは、生まれてすぐに東西南北の四方に七歩ずつ歩き、右手で天を指さし左手で大地を指さして、「天 上天下唯我 独尊」と言われたと伝えられています。しかし、生まれたばかりの赤ちゃんが歩ける筈も言葉を話せる筈もありません。お釈迦さまが常識では計れない程に偉大な方であったということ表現するために、初期の伝記には無いお話も、時代が移るにつれて加わっていきました。

お釈迦さまのご生誕やお亡くなりになった年代にはさまざまな説があります。南方アジアでは、お釈迦さまは紀元前五四四年に八十歳で亡くなった説をとり、一九五六年から一九五七年にかけてお釈迦さま没後二千五百年の記念式典を盛大に行いました。

曹洞宗で出版されている『仏教概論』という本では、お釈迦さまのご生涯は紀元前四六三年から三八三年までと記されています。他にもお釈迦さまの亡くなった年が紀元前四八〇年頃の説がいくつかあります。

生まれた日も、「ヴェーサーカ月の満月の日」という記録があり、それは五月であるという説や、第二月というので二月だという説もあります。日本では『仏所行讚』という仏伝にならい、四月八日に花まつりを行います。

古代インドでは、文字で記録する習慣が無かったので、お釈迦さまの教えや伝記などは、かなりの年数を経てから記録されたため、口から口に伝えられていた時代の間には調べる術も失われ、色々な人々の思いが加えられたり、思想的な融合があったり、政治的なものが加えられたりして、事実が失われていくこともあるのです。

お釈迦さまは、実在した人間として、お釈迦さまのお骨である仏舍利やお釈迦さまの教え、仏教教団などが残っているのです。人間であるお釈迦さまが素晴らしい生き方を示し実践されたので、曹洞宗ではご本尊さまとしてお祀りしているのです。

曹洞宗の花まつりは、人間お釈迦さまの誕生を祝う日なのです。